『人間と環境』7（2016）
Journal of Human Environmental Studies 7（2016）
ISSN 2185-8365

児童養護施設における
性的問題に対する体制と取り組みについて

坪井　裕子
柴田　一匡
米澤由実子
三後　美紀

〈キーワード〉
①児童養護施設　②性的問題　③性教育

〈論文要旨〉
本研究の目的は、児童養護施設における子どもの性的問題に対する施設の体制と取り組みを明らかにすることであった。X県内の児童養護施設を対象に質問紙調査を行い、18施設29寮舎の分析を行った。その結果、個人や男女の境界を守ることが難しい施設があることが示された。多くの施設では、ルールにより境界を明確にする指導が行われていることが明らかになった。子どもへの性教育等の予防的な取り組みを行っている施設も半数以上あることが示された。特に規模の大きい施設（大舎）では、建物の構造上、個別性への配慮が難しい面があることも示された。各施設でのルールやケアに関する工夫について検討する必要があることが示唆された。

Systems and Approaches for Handling Sexuality Issues in Children's Homes

Hiroko TSUBOI
Kazumasa SHIBATA
Yumiko YONEZAWA
Miki SANGO

〈Keywords〉
① Children's homes　② sex-related problems　③ sex education

〈Abstract〉
The purpose of this research was to clarify the systems and approaches in place for handling sexuality issues among children in Children's homes. A questionnaire survey of Children's homes was conducted, and the data from 18 facilities and 29 dormitories were analyzed. The results showed that some of these facilities had difficulty in maintaining boundaries between individuals or between boys and girls, and that majority of the facilities developed some rules to provide the residents guidance to define those boundaries. Further, more than half of the facilities that participated in the survey engaged in an effort to prevent sex-related problems (e.g., providing sex education to the children). dditionally, some facilities, especially larger facilities had difficulty providing individual attention to the residents because of the building structure of such facilities. These results suggested that it would be necessary to consider the rules and care methods used at each facility.

児童養護施設における 性的問題に対する体制と取り組みについて

坪井　裕子
柴田　一匡
米澤由実子
三後　美紀

問題と目的

児童福祉施設における性的問題については、近年、どの施設でも対応が必要な課題であると認識されつつある。海野・杉山（2007）によると、ある児童養護施設での性的問題のケアを行った際に、定員 35 名のうち性的な加害も被害もない児童が 2 名のみだったと報告されている。このように、どの施設でも起こりうることであると考えられながら、その実態があまり明らかにされておらず、まとまった統計データが今のところ示されていないのが実情である。性的問題が起きた場合の対応も、基本的には各施設に任されている。施設ごと、事例ごとに異なった工夫がされていると考えられるが、それらの蓄積が共有されていないなど課題が多い。榊原・藤原（2010）は、性的問題行動への捉え方は個々の職員の判断や力量に依存しやすいことを指摘している。さらに、施設全体のコンセンサスが得られた構造化やルールの構築が課題であると述べている。性的な問題はなかなか明るみに出にくい問題であり、施設でのケアを進める上でも課題が多い。

児童福祉施設のなかでも特に児童養護施設には、虐待を受けた子どもたちが多く入所するようになり、子どもたちの示すさまざまな問題が指摘されている（坪井，2005 など）。子どもたちは、対人関係の基礎となる愛着の問題も抱えていることが多いため、親密な他者との関係をうまく築くことができずに、他者との関わりの際にストレートな身体的（性的）接触になってしまうという恐れがある。

施設内での性的問題がきちんと対応されないことによって、当初は被害者だったものがやがて成長して加害にまわる例（山口，2011）や、性的問題の悪循環につながる（相澤，2011）ことについても指摘されている。施設内での性的問題に正面から取り組み、課題を明らかにして、具体的な対応策をとっていくことは急務である。そのため性的問題の対応を考えるにあたっては、まずはその実態を把握することが必要である。

滝川ら（2012）は、全国の情緒障害児短期治療施設（以下、情短と略す）を対象に、施設の子どもたちの性的問題および性化行動や、性的問題に関連する問題の実情を把握している。その結果、情短では、性的問題を引き起こしやすい行動をする子どもが 1 割以上いるということが示されている。性的問題行動について、直接的な行動は男子に多く、女子は間接的な行動で問題となることも示されている。また、性的問題以外の関連するものとしては、衝動や欲求の制御の難しさ、自他の境界感覚の未熟さ、自己評価の低さなどいくつかの問題が明

らかになっている。さらに施設の構造や対応のあり方、取り組みの実態、性的加害の実情についても調査している。それによると、施設の物理的な境界や環境設定が、性的問題の抑止につながることが示されている。また施設内での性教育や、被害に早く気がつくような取り組みを重視している施設が約 6 割に上っている。ただし、認識や取り組みの現状は、施設間で差があることも示されている。

このように情短では、実情把握の調査がされてきているが、児童養護施設における実態を把握する調査はまだ見当たらない。児童養護施設においても施設の現状を把握し、課題を検討することで、施設における性的問題へのより良い対応と、問題発生の予防を検討する材料が得られると考えられる。そこで、施設が抱えている性的問題と、各施設における性的問題への対応についての実態を明らかにするためのいくつかの調査が必要だと考える。そのうち本研究では、児童養護施設におけるケアの体制と性的問題への取り組みに焦点をあてて実態を明らかにすることを目的とする。

方法

調査協力施設：X 県内の児童養護施設のうち、文書によって協力への承諾が得られた 18 施設の 29 寮舎を対象とする。29 寮舎の内訳は、大舎（1 舎につき子ども 15 人以上）10 寮舎、中舎（子ども 9 ～ 14 人）9 寮舎、小舎（子ども 8 人以下）3 寮舎、小規模グループホーム（子ども 6 人以下）7 寮舎であった。

方法：質問紙調査を行った。

調査内容：フェイスシートでは、記入者の性別、年令層、職種、役職、施設種別、施設形態、入所定員、直接処遇職員数を尋ねた。児童養護施設のケアの体制や性的問題への取り組みなどを尋ねる質問項目として、「情緒障害児短期治療施設における性的問題行動の対応に関する研究」（滝川ら，2012）と同じ 19 項目を用いて、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の 3 件法で回答を求めた。

倫理的配慮：実施にあたり、研究目的・方法等について、各施設あてに文書および一部施設では口頭でも説明し、協力を依頼した。施設、記入者は匿名とし、データの管理は厳重に行い、今回の一連の研究以外にはデータを使用しないことを説明した。

分析：上記の調査内容のうち、本論文では、児童養護施設の性的問題への対応や援助体制に焦点をあてて分析を行った。

結果と考察

1. 施設状況に関する各項目の回答

29 寮舎から得られた回答について、各項目に「はい」「どちらでもない」「いいえ」と答えた割合を図 1 に示す。情短の回答（滝川ら，2012）との比較から、児童養護施設の特徴と考えられることを以下に述べる。

(1)　境界について

個人の境界について、Q1「個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている」

は 34.5%、Q2「個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている」では 44.8%の施設が「はい」と答えている。これは情短とほぼ同じ割合であるが、物理的な環境の制限から個人のスペースが取りにくい施設があるということである。そのため、スペースの使い分けに配慮した指導が必要となるが、Q2 に「いいえ」と答えた施設が 20.7%あり、そのうち 3 施設は Q1 でも「いいえ」と答えており、施設によっては、境界の使い分けの指導が十分に出来ていないといえる。多くの子どもが生活している施設という場における個人のプライバシーの尊重は、まだまだ難しい状況にあるといえる。

次に男女の境界について、Q3「男女の居住空間が構造的に分かれている」には 51.7%が「はい」と答えている。Q4「男女の居住空間がルールで守られている」では、情短では 100%が「はい」と答えているのに対し、児童養護施設で「はい」と答えたのは 82.8%にとどまっている。男女の居住空間が構造的にもルールでも守られていない児童養護施設が 2 施設あり、いずれも大舎であった。入浴、トイレに関する質問（Q5、6）では、必要に応じて個別に利用できる施設が、それぞれ 84.6%、76.9%であった。入浴が個別に出来ないと明確に答えたのは 1 施設（大舎）のみであった。大舎のなかでも施設の作りが古い場合、施設の構造や運営上、境界設定や個別的な対応への難しさがあるのではないかと考えられる。Q7「死角が少なくなるような工夫」については、38.4%の施設が工夫を行っていると回答している。性的問題は大人の目が行き届かないところで起きると考えられるため、このような取り組みはもっと必要であろう。

(2)　ルールについて

施設内でのルールの統一に関して、Q8「ルールが明確に決められ、生活の手引きなどが用意されている」に「はい」と答えた施設は 41.4%であった。これは情短の割合（66%）と比べやや低く、手引き等が整っていないところがあるということを示している。Q9「職員間でルールが共有され、大きくズレて混乱することはない」に「はい」と答えた施設は 69.0%であった。これは情短の回答（63%）とほぼ同じ割合である。性に関するルールについては、Q10「ポルノ（雑誌や DVD など）の持ち込みを禁止している」で「はい」と答えたのは 41.4%で、情短（88%）に比べ、規制が緩いことが示されている。Q11「施設内の男女交際を禁止している」については 13.8%、（情短は 54%）、Q12「施設外の男女交際を禁止している」については 3.4%（情短は 43%）の施設が禁止している。いずれも情短に比べて禁止している施設の割合はかなり低い。これは、多くの情短が施設内に学校を持っており、ある程度、守られた環境を保てるのに対して、児童養護施設の子どもは地域の学校に通い、地域との交流があるという点での違いであるとも考えられる。児童養護施設は、地域の中で生活する施設であることから、男女交際も一概に禁止しにくいと考えられる。そのため、交際を単に禁止することではないやり方を模索しなくてはならない難しさがあるといえるだろう。

(3)　性教育の取り組みについて

Q13「グループで性教育を実施している」のは 51.7%（情短は 54%）、Q14「個別で性教育を実施している」のは 62.1%（情短は 54%）で、いずれも半数を超えている。近年、多

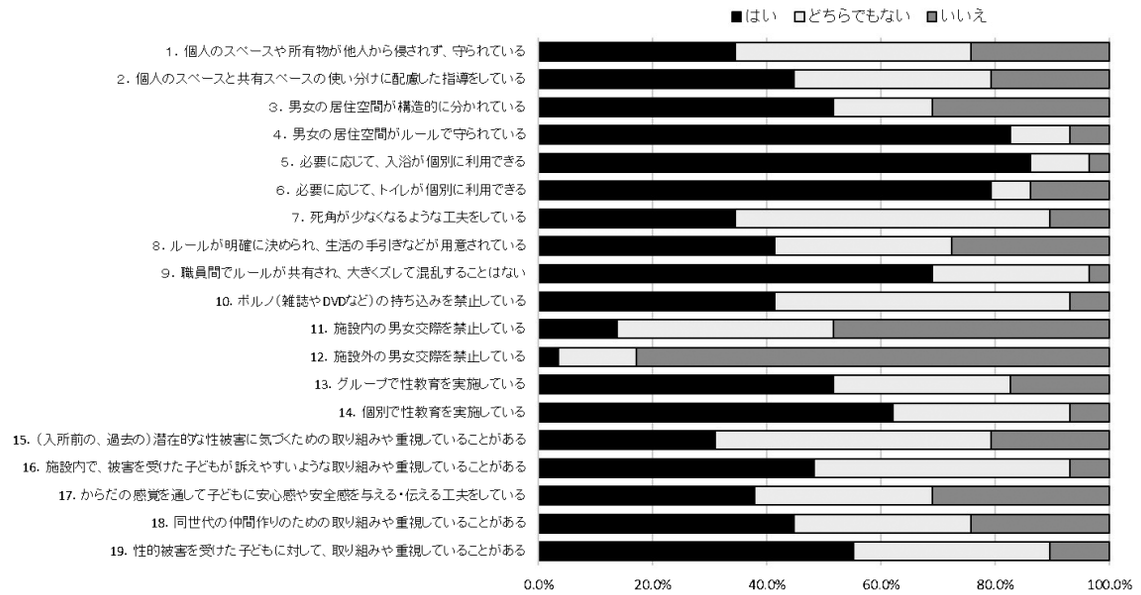


図１　各項目の回答

くの児童養護施設で性教育の導入が始まっているが、実施の仕方については各施設で差異があることが指摘（米澤・坪井，2015）されている。対象の性別や年齢、グループか個別か、内容や教え方、指導者についても、多くの検討が必要であるといえる。

(4)　過去の性被害に気づくための取り組み

過去の性被害に気づくための取り組み（Q15）は重要なことであるが、「はい」と答えた施設は31.0％にとどまっている。被害を訴えやすいような取り組み（Q16）については、48.3％が「はい」と答えている。いずれも情短よりやや低めである。子どもからのサインをキャッチしやすいように施設職員がアンテナを張っておくことも必要となるであろう。さらに「性的被害を受けた子どもに対して、取り組みや重視していることがある」（Q19）に対して「はい」と答えた施設は55.2％であった。これは情短（50％）とあまりかわらない割合である。情短では、「いかにして守られているという安心感を持ってもらえるか」という視点が挙げられており、これは児童養護施設においても大事な視点であるといえるだろう。

(5)　身体の感覚を通して児童に安心感や安全感を与える工夫

Q17「からだの感覚を通して子どもに安心感や安全感を与える・伝える工夫をしている」については37.9%（情短は29％）、Q18「同世代の仲間作りのための取り組みや重視していることがある」については44.8%（情短は62％）が「はい」と答えている。具体的に何を行っているのかの記載が得られていないため、今後の課題として実際にどのような取り組みが行われているのかを確認していく必要があるといえる。

2. 寮舎の規模による違い

寮舎の規模の違いによって体制や取り組みに違いがあるのかを検討するために、大舎（10寮舎）、中舎（9寮舎）、小舎（小規模グループホームを含む10寮舎）の3群に分けて検討

表１　施設形態による各項目の回答（N=29）

番号	項目内容		はい	どちらでもない	いいえ
1	個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている	小舎・小規模	4	4	2
		中舎	2	4	3
		大舎	4	4	2
2	個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている	小舎・小規模	5	3	2
		中舎	1	6	2
		大舎	7	1	2
3	男女の居住空間が構造的に分かれている	小舎・小規模	5	2	3
		中舎	5	1	3
		大舎	5	2	3
4	男女の居住空間がルールで守られている	小舎・小規模	9	1	0
		中舎	8	1	0
		大舎	7	1	2
5	必要に応じて、入浴が個別に利用できる	小舎・小規模	10	0	0
		中舎	9	0	0
		大舎	6	3	1
6	必要に応じて、トイレが個別に利用できる	小舎・小規模	9	1	0
		中舎	7	0	2
		大舎	7	1	2
7	死角が少なくなるような工夫をしている	小舎・小規模	2	7	1
		中舎	4	5	0
		大舎	4	4	2
8	ルールが明確に決められ、生活の手引きなどが用意されている	小舎・小規模	5	2	3
		中舎	3	5	1
		大舎	4	2	4
9	職員間でルールが共有され、大きくズレて混乱することはない	小舎・小規模	9	1	0
		中舎	4	4	1
		大舎	7	3	0
10	ポルノ（雑誌やDVDなど）の持ち込みを禁止している	小舎・小規模	3	7	0
		中舎	4	5	0
		大舎	5	3	2
11	施設内の男女交際を禁止している	小舎・小規模	1	5	4
		中舎	1	1	7
		大舎	2	5	3
12	施設外の男女交際を禁止している	小舎・小規模	0	2	8
		中舎	0	0	9
		大舎	1	2	7
13	グループで性教育を実施している	小舎・小規模	5	3	2
		中舎	6	1	2
		大舎	4	5	1
14	個別で性教育を実施している	小舎・小規模	6	3	1
		中舎	7	2	0
		大舎	5	4	1
15	（入所前の、過去の）潜在的な性被害に気づくための取り組みや重視していることがある	小舎・小規模	3	6	1
		中舎	1	6	2
		大舎	5	2	3
16	施設内で、被害を受けた子どもが訴えやすいような取り組みや重視していることがある	小舎・小規模	4	6	0
		中舎	4	5	0
		大舎	6	2	2
17	からだの感覚を通して子どもに安心感や安全感を与える・伝える工夫をしている	小舎・小規模	4	3	3
		中舎	3	3	3
		大舎	4	3	3
18	同世代の仲間作りのための取り組みや重視していることがある	小舎・小規模	3	3	4
		中舎	7	1	1
		大舎	3	5	2
19	性的被害を受けた子どもに対して、取り組みや重視していることがある	小舎・小規模	5	5	0
		中舎	7	2	0
		大舎	4	3	3

した。施設形態ごとの各項目の回答を表1に示す。

χ^2検定およびフィッシャーの直接法を行い、さらに残差分析を行った。その結果、Q2「個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている」では大舎は中舎より有意に「はい」が多いことが示された（調整済み残差＝2.0，$p < .05$）。大舎は子どもの人数も多いため、スペースの使い分けに配慮がより必要であるからといえるだろう。Q4「男女の居住空間がルールで守られている」においては、大舎は中舎および小舎より「いいえ」が多かった（調整済み残差＝2.0，$p < .05$）。大舎は子どもの人数が多いことから、本来はルールが十分に機能していることが望ましいが、実際には難しい施設があるということが示されたといえる。Q5「必要に応じて入浴が個別に利用できる」では、大舎は中舎および小舎より有意に「はい」が少なかった（調整済み残差＝−3.0，$p < .01$）。やはり個別性への配慮が難しいといえる。Q10「ポルノ（雑誌やDVDなど）の持ち込みを禁止している」では大舎は中舎・小舎より有意に「いいえ」が多かった（調整済み残差＝2.0，$p < .05$）。Q11「施設内の男女交際を禁止している」では中舎が大舎・小舎より有意に「いいえ」が多かった（調整済み残差＝2.1，$p < .05$）。これらについては、一概に禁止することが良いとも言い切れない問題である。したがって、禁止していない場合、実際にどのような対応がなされているのかを明らかにしていく必要があるといえる。Q16「施設内で、被害を受けた子どもが訴えやすいような取り組みや重視していることがある」では大舎は中舎・小舎より有意に「いいえ」が多かった（調整済み残差＝2.0，$p < .05$）。Q19「性的被害を受けた子どもに対して取り組みや重視していることがある」では大舎は中舎・小舎より有意に「いいえ」が多かった（調整済み残差＝2.5，$p < .05$）。中舎・小舎では「いいえ」と答えた施設がなかったのに対し、大舎では3施設が「いいえ」と答えており、取り組みの遅れているところがあることが示されたといえる。

これらをまとめると、児童養護施設の中でも、特に大舎では、子どもの人数の多さや構造上の問題等から、個別対応の難しさや、ルールによるコントロールの難しさが示されたといえる。児童養護施設は、家庭養育になるべく近づけるために、小規模化が進められてきているものの、実際にはまだまだ大舎制のところも多い。滝川ら（2012）の情短の調査では、施設の物理的な境界や環境設定が、性的問題の抑止につながると述べられている。児童養護施設のなかでも、特に大舎や古い建物の施設において、ハード面での限界がある中で、子どもたちの個別性への配慮や対応について、ルールや運用などによる環境設定等のソフト面での工夫が求められるといえるだろう。

まとめと今後の課題

本研究では、性的問題に関連して児童養護施設における施設の体制や取り組みなどを明らかにしてきた。いくつかの施設では、建物の構造上、個別性への配慮が難しい面があることが示された。構造上の難しさがある中で、各施設でルールや指導による環境整備やケアの工夫がされているといえる。また半数以上の施設で、予防的な取り組みとして、グループや個別での性教育等が行われていることも明らかになった。それだけ性的問題への対応が重要に

なっていると考えられる。

今後の課題としては、各施設で実際に行っている取り組みや工夫について、具体的に明らかにしていくことである。特に性教育を含めた心理教育に関しては、子どもの包括的な発達支援の視点が重要である。各施設に配置されている心理職が、施設内での心理教育等の取り組みにどのように関わっているのか、あるいはどのように関わっていくと良いのかについても検討すべきである。それらを含め、各施設で行っている有効な取り組みや工夫については、他の施設でも共有できるように、知見を蓄積していく必要があるといえる。

文献

相澤林太郎（2011）子どもの性的問題と予防的支援―児童自立支援施設での取り組み（特集 生と性）―（児童福祉における性教育と生命（いのち）の教育），世界の児童と母性，71，53-60.

榊原文・藤原映久（2010）児童養護施設入所児童の性問題行動について―児童養護施設職員へのフォーカス・グループ・インタビューを通じて，子どもの虐待とネグレクト，12（3），386-397.

滝川一廣・平田美音・玉井邦夫・坂口繁治・平岡篤武・増沢高・奥山志麻・大塚斉・相澤林太郎・堀健一（2012）情緒障害児短期治療施設における性的問題への対応に関する研究（第 1 報），子どもの虹情報研修センター平成 21・22 年度研究報告書.

坪井裕子（2005）Child Behavior Checklist/4-18（CBCL）による被虐待児の行動と情緒の特徴：児童養護施設における調査の検討，教育心理学研究，53（1），110-121.

海野千畝子・杉山登志郎（2007）性的虐待の治療に関する研究 その 2：児童養護施設の施設内性的虐待への対応，小児の精神と神経，47（4），273-279.

山口修平（2011）児童養護施設の性教育の実際－職員組織作りと児童に伝わる実践（特集 生と性）-（児童福祉における性教育と生命（いのち）の教育），世界の児童と母性，71，46-52.

米澤由実子・坪井裕子（2015）児童福祉施設における性教育の取り組み―X 県内の各施設取組みの報告集より―，臨床心理研究―人間環境大学附属臨床心理相談室紀要，9，35-44.

付記

本研究の調査にご協力下さいました児童養護施設の皆様に厚く御礼申し上げます。また、情緒障害児短期治療施設の調査項目を用いることについて快くご許可下さいました滝川一廣先生（学習院大学）に心より御礼申し上げます。なお本研究は、公益財団法人日工組社会安全財団平成 24 年度一般研究助成、および日本学術振興会科学研究費基盤研究 C（No.15K04159 代表：坪井裕子）の助成を受けて行われたものである。

坪井　裕子（名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授
／人間環境大学人間環境学部非常勤講師）
柴田　一匡（名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程）
米澤由実子（人間環境大学大学院非常勤助手
／名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程）
三後　美紀（人間環境大学人間環境学部講師）